

1970年

幼児教育に望む

——保育者の立場から



柴田いっつ

一九七〇年の夜明けは、やはり平穏にそして毎年迎える新年と少しも変わることなく、新しい年への抱負と新鮮な息吹きが感じられます。でも安保・沖繩問題と、ただならぬ社会状況が私たちのまわりにうずまいていますし、この一九七〇年というふうには、特別にテーマを前にするとき、やはり切迫したものを感じないわけにはまいりません。

けれども、「一九七〇年のこんには……」——（世界の国からこんにははのうた）——と、幼児たちといっしょに口ずさみながら、軽やかなメロディにあわせて輪をつくるとき、むずかしいいくつかの問題や、緊迫感のただよう社会の動きなど、それはそれとして、幼い子らの夢とあどけなきはこのままにしておいてやりたいという気持ちにかられるのです。

とはいっても、マスコミによる幼児たちへの影響はおおきく、それぞれの地域のかかえている問題や、ゆがめられたまわりの地

域社会によって、正常な幼児たちの発達を阻害している面もかなり多くあるように思われますが、やはり私は、根本的に考えて、保育者としての指導のあり方について反省し、現代社会に生きる幼児たちの指導はこれよいか、一九七〇年とかまえ過ぎて、私たちのなすべき方向を見失うことのないようにしていきたいと考えます。

目の前にいる幼児をどう育てていくか

毎年入園してくる幼児を迎えて、時代の変化とともに、幼児の興味や行動面にも変化がみられてきます。まわりの環境やおとなの生活態度が、幼児の世界にはいりこんで、幼児のあそびや考え方も表面的には変容してきているように思われます。おとななどの話も通じ、「カッコイイ」とか、「安月給ですよ」といった言葉の調子や、生活のちえから生まれるこざかしさは、幼児とは思え

ないような面があり、なにが、幼児期を脱したかの感をもちます
が、果たしてそうでしょうか。

子どものあそびにも、三十六階ビルとか地下三階、ここはバス
ルーム、ここはキッチンとか、また、セスナーはちびっこ、ぼく
のは八十人乗り旅客機だといって、語いもふえ、文化的な感覚が
はいりこんできていますし、園の「おたより」のプリントをみ
て、「またおかね？ なんのおかね？」ときく幼児、「ぼくばか
りもっていくのは損だから、あの子にしてよ」——（欠席児への連
絡）——といった不満をもつ幼児や、あるいは、他人の家の窓ガラ
スを割って、悪かったと思うきもちより、「また払わんならん」
といったような言葉のでる幼児たちをみると、この幼児たちの毎
日の生活——つまり家庭における、いや、社会における思想を反
映しているように思われるのです。

つねに、自分本意に考え、先走った知的面の育て方は、頭ばか
りでつかくなって、足元がぐらついていても、気付かないでいる
ような面がでてきているのではないのでしょうか。

目の前の幼児たちの考え方や態度について、私たちはあそびの
なかでいくつか示してくれる幼児たちの姿から、もっともっと理
解していくことが、この移りいく現代のなかでまず大切であり、
その幼児の実態をふまえたいうでの指導の目標をたてなければな
らないことは当然でしょう。合理的で文化的な生活を営む現代
に、素朴な面が軽視されていくような傾向において、幼児期には

なおさらのこと、人間としての大切な素地をつくっていくことか
ら、目の前の幼児をどう育てていくのか、もう一度考えなおして
いく必要を感じます。

豊かな感情と自己表現をめざして

幼児教育においては、望ましい幼児の姿は示されていても、そ
の教育内容は、それぞれの地域のそれぞれの園で、それぞれの保
育者の手にゆだねられています。そして保育者と幼児とによつて
つくりあげていく毎日の生活の流れには、表面的からみでは、他
と共通するところがあっても、ひとりひとりの幼児についてのそ
の一日一時間が大切なかけがえのないものであって、その一日の
くりかえしのなかにこそ、積みあげられていく、人間として大切
な要素を含んでいると思われまます。

さきにもべましたように、目先は成長したかのようにみえて
も、そのまま幼児の感情や知的面の発達と結びつくとは限りませ
ん。

二段式ベッドをつくって人形をねかせたり、「ウエイトレス」
といって頭にナフキンをかぶり、かがいしくねんどの「ごちそ
う」を運んだり、捕鯨船といって、ダンボールの舟を左右に動か
して、海の上を鯨めがけて走っているようすや、海底の鯨や魚と
いって、床の上をたくみに体を動かしている幼児たちをみると
き、また、ヤクルトの容器をつないで、象の鼻にと苦心して、少

しでも実物に近いものを表現しようとする姿をみると、やはり未分化な状態から徐々に分化していく段階へと発達していく限りない可能性を見いだします。

そしてそのなかにあつて、毎日のくりかえされる経験のなかで、幼児たちはお互い自分たちの接触のなかで、豊かな人間関係をはぐくんでおります。ひとりの幼児がみんなできめたルールを破つて、まわりの幼児たちに問いつめられたり、教師からもさとされているとき、「ごめんいえよ、てれくさいのか」と、そのことばのニュアンスに、その場を救ってくれるすばらしい幼児の仲間もいますし、こまのまわし方や、あやとりの手順を教えあつている幼児の表情をみると、ほんとうに素朴な幼児らしさを感じるのであります。

と同時に、また、教師自身の指導のかまえや幼児をみる目のたしかさと深さを、もつともつとたなければと思つたのです。時代は変わつても変わらない基本的な幼児と幼児、教師と幼児との人間関係の豊かさと素朴さは大切にしていきたいと考えます。

この一九七〇年は、新時代を開発し、みずから創造していきける人間としての教育をめざして、小・中の教育課程の検討が加えられ、実践の年ともいわれますが、だからといつて幼児たちにも、知識を早急につめこもうとしたり、技術面に走つたり、リーダー中心の統制ある集団にと規制してこうとする方向は、幼児の発達からみて問題ではないかと思われれます。

以上保育者として、卒直なありのままの反省とともに、最近とくに考えさせられることは、両親の誤つた幼児教育への期待です。一年生になつてから劣等感をもつてはと、文字や数の指導をつよく要求する母親、ピアノ、英会話など他人のこととなると、批判しながらも、おおいに、みずからの競争心をあおっているような母親が多くなりつつあるような現在、全く無関心・放任と同じく、いきすぎた期待のもとに育てられる幼児の多いということも考えさせられます。

ともあれ、人間としての基礎的な基盤としての幼児教育の重要性は強く叫ばれながらも、「教育」の片すみに、いろいろな面からみて、追いやられていくといった感があります。その他行財政面でも、いくつつかかえる問題は多く、それらがひずみとなってきている面も考えられるのですが、私たち保育者としては、正常な発達をとげ、幼児らしさを十分に發揮できるための経験や活動はどうあるべきかを考え、そして心の目・心の豊かさ・ひらめきなど、人間としての思考や行動力の支えになる要素のめばえを養つてやりたいと思ひます。

幼児期は二度とまいりません。だからこそ、この幼児期を豊かに送らせてやることは、一九七〇年においても基本的には変わらないと思ひます。